

宮川ひろの未発表作品「春駒」について

—— 解題と本文紹介 (三) ——

要 旨

日本の現代児童文学作家宮川ひろは、代表作『春駒のうた』刊行以前に、同じ題材での試作を繰り返したと語っている。今回、『春駒のうた』につながる最初期の作品とみられる未発表作品「春駒」の原稿を確認する機会を得た。これは、宮川ひろのご子息宮川健郎氏が保管しているものである。本稿では、前稿に引き続き、未発表作品「春駒」の第八章から第九章までの本文紹介を行うとともに、推敲状況を明らかにした。そのうえで、「春駒」の現存稿は宮川ひろの児童文学の研究にどのような情報を提供するものなのか、原稿の確認を通して見えてきたことを整理して示した。

キーワード：宮川ひろ、児童文学、「春駒」、「春駒のうた」

本稿は、「宮川ひろの未発表作品「春駒」について—— 解題と本文紹介 (二) ——」(『宮城教育大学紀要』第五六巻、二〇二二年一月)、「宮川ひろの未発表作品「春駒」について—— 解題と本文紹介 (二) ——」(『宮城教育大学紀要』第五七巻、二〇二三年三月)の続稿である。これまで、未発表作品「春駒」について、作者宮川ひろ自身の発言と現存稿の状態の確認をしたうえで、二〇二一年秋の時点で所在が明らかになっていた現存稿全一三三枚(作品第五章まで)の本文と推敲過程の紹介を行った。その続きとして今回は、二〇二二年二月になって発見された原稿四九枚(原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.190」から「No.239」まで)について、発見の経緯と発見内容を説明したうえで、そこに記された作品第八章「貞治の出征」と第九章「揃いの単衣」の本文と推敲状況を紹介する。その後、これまで行ってきた「春駒」

の現存稿の紹介を振り返り、宮川ひろの児童文学研究に資する情報として何が得られるのか簡潔に整理して示したいと思う。

七 二〇二二年二月に発見された「春駒」最終部分の原稿について

二〇二一年九月二五日に、宮川ひろの未発表作品「春駒」の現存稿を、ひろの長男で著作権管理者である宮川健郎氏の御宅で拝見した。それは、一枚ずつ二つ折りにされて重ねられ、黒い綴じ紐で袋綴じにされたB4版四〇〇字詰めの原稿用紙一三三枚の束で、全九章で構成されている作品の前半部分、第五章の章末の直

大*中*
木地
葉
子文

* 教員養成学系 教科内容学域 人文・社会科学部門 国文学
** 東北工業大学准教授

前までが記されていた。

当時、宮川健郎氏は、「春駒」の現存稿はこの一三三枚のみで、後半がどこにあるのかはわからない、発見できる可能性は低いと語っていた。ところが、二〇二二年三月一日、新たに原稿が発見されたというお知らせを宮川健郎氏よりEメールでいただく。それによると、発見日は二〇二二年二月十九日、発見の経緯と内容は次の通りとのことである。

昼ごろ、家のなかで、ちょっとスペースを空ける必要があつて片付けていたのですが、1階から2階に上がる階段の下に古いダンボール箱があつたのを引っ張り出してみました。

出してみると、箱の上ぶたに、赤いマジックインキでやや大きく、もうすすけた字で「一感」^マと書かれています。

これは亡くなった母の字で、1985年に、それまで長く暮らした東京都板橋区の家から、現在の国分寺市に引っ越したときの荷物の一つと思われます。

箱のなかの主なものは、下記のとおり。

○ 未発表原稿「春駒」の最終部。190〜229ページ（ページは400字原稿用紙1枚を1ページとしている）。

原稿は、まったく裸で、綴じられていません。ほかのもののあいだに、ただ、はさまっていました。

今年度の紀要に中地さん、大木さんの調査報告が記されていますが、原稿後半の失われていたものの一部です。

やはり、紀要に書かれている目次でいうと、「八 貞治の出征」のはじめから最終章「九 揃いの単衣」まで。

ただし、最終章は、最後の10枚がありません。また、途中の134〜189ページもあります。

○ 『夜のかげぼうし』（講談社 1978年）、『東京へ帰る日まで』（同前1985年）の先駆稿と思われるもの。全296ページ（ページは400

字原稿用紙の片面ずつにふられている）。

これは、きちんと紐で綴じられています。表紙が失われていて、タイトルがわかりません。

教師として経験した静岡の学童疎開、秋田への再疎開について綴られている。細かく章立てされている。記録ではあるが、少し会話文などもあり、いくらか小説ふうである。

いつ書いたものかわかりませんが、やはり、作家デビュー以前であることは確かだと思います。よく読んでみないとわかりませんが、もしかすると、上記の「春駒」より物語性が少ないことから、「春駒」より前かもしれない。

○ 産休補助教員として担当したクラスの子どもたちのお別れの作文を綴じたファイル。

○ 活字になっている短編10ほどの原稿。

このEメールによって、「春駒」の原稿の「190〜229ページ」が新たに発見されたことを知り、宮川健郎氏にそれを拝見したいとお願いしたところ、ご許可を得た。東京国分寺の御宅で新たに発見された「春駒」の原稿を閲覧させていただいたのは、二〇二二年五月二一日、二二日である。確認の結果をまとめると次のようになる。

新たに発見された原稿は全四九枚。原稿用紙は、これまでに確認されていた一三三枚と同じもので、B4版四〇〇字詰め、茶色の野で左側下欄外に「20×20」と入っている。そのほかに製作者の記載等はない。原稿用紙右側の上欄外の「No.」記入欄に、原稿用紙一枚を1ページとして、「No.190」から「No.239」までページ番号が打っており、前掲「宮川ひろの未発表作品「春駒」について——解題と本文紹介（二）——」で紹介した「目次」と照らし合わせると、記されているのは第八章「貞治の出征」と第九章「揃いの単衣」の全文であると判断できる。Eメールでは、発見されたのは「190〜229ページ」で、「最後の10枚」は欠落しているとのことだったが、「No.239」までの原稿が

実在し、最終章は完結していた。この四九枚の原稿用紙は、すべて一枚ずつ二つ折りにされていて、折山とは反対側の端、中央付近に綴じ孔が二つあっていた。前半の原稿と同様に、かつては紐で袋綴じにされていたが、今回発見された箱に詰められる前の段階、すなわち一九八五年の引越し以前に、紐からはずされて保管されていたということであろう。このような原稿の保管状況からは、宮川ひろ自身にとって「春駒」の現存稿とは何だったのかがある程度見えてくるが、それは後述することにする。

第八章と第九章の原稿が発見されたことによつて、未発表作品「春駒」は、目次に示された全九章のうち、第一章から第五章（ただし、章末の二ページ分が欠落）と第八章、第九章が現存し、第六章「将来の希望」と第七章「師範学校」が未発見ということになった。二〇二四年一月現在、「春駒」の欠落原稿の行方は、依然として明らかになっていない。

八 未発表草稿「春駒」の本文紹介(三)

次に、二〇二二年二月に新たに発見された原稿に記されている未発表作品「春駒」の第八章、および第九章の本文紹介を行う。本文決定の方針は左記のとおりであり、本文には推敲の最終段階を示した。

- (1) 本文の表記、仮名遣い等は、原則として原文通りとする。
- (2) 漢字は、原稿では正字・俗字、旧漢字・新漢字が混用されているが、意図的な使い分けと判断できる場合をのぞいて、常用漢字の字体に統一する。
- (3) 誤字・脱字等は、ママとルビを付してそのまま記す。昭和初期の慣用表記と考えられるなど、必ずしも誤りとはいえないものも、用字・表記が今日の通常のものとは異なる場合は、ママとルビを付して記す。文字や記号が入るべきところに入っていない場合は、空欄を□で示し、□にママとルビを付した。
- (4) 拗促音は、原稿では使用に不統一が見られるが、意図して使い分けられていると考えられる場合を除いて、小書きに統一する。

(5) 送り仮名は作者の記した通りとする。

(6) 句読点は、書き癖で句点か読点か不明確なものが多いが、明確に判断できる場合を除き、文脈にそくして判断して記す。

(7) 字下げ、行あげ等の指定は、原文通りとする。

(8) ルビは、作者自身が付したものを、付したとおりに示す。文字を記さずに空欄にルビだけ付している場合（後から漢字を入れる予定だったと考えられる部分）は、空欄を□で示し、□にルビを付した。

貞治の出征

「本日は御多忙中にもかかわらず私の為にかくも多数の皆様のお見送りをいただきまして感謝の外はありません、入隊の暁は一意専心以て軍務に勉勵し御厚恩の万分の一にも報ゆる覚悟でございます 留守中は又家族の者が何かとお世話になることと思いますがどうぞよろしくお願い致します」

貞治は今朝も手拭を肩に歯ブラシを右手に持ったままで出征兵士の挨拶の真似を本気になってやっている。漬物を刻んでいた雪子は又はじまったと思いつら

「貞兄はそんなに毎日練習していて甲種になれる自信があるんかや」

「なくてどうでしょう大ありでござんす」

「そんなに細い甲種なんて見たことがねえ」

「だからさあと三ヶ月の間に一貫五百匁だけはどうしても太らなければならねえだから炊事伍長殿栄養のあるものを頼みますぜ」

「はい はい」

雪子にしても兄の切なる望を叶えてやりたかったし勇士の妹として兄の首途を華々しく送つてもやりたかった 時は昭和十五年の四月皇軍の威力は至るところに輝いて好戦的な空気はこんな山深い田舎の村にまでゆきわたっていた。小さい時から鎌を握りしめて土を耕し炭俵を背負つて山の道を歩いて育つた若者の体はがつちりと□しく成長してその七割位までが甲種合格という成績を示すのだった。郡下の町村が一斉に徴兵検査の結果を競つて小学校の校長先生は朝礼台の上から自分の村の成績順位を児童に報告して

「あなた方も先輩諸兄の名誉をけがさない様に立派に体を鍛えてやがて来る

べき日にこそはお国を守る人になつてもらはなければなりません」

と励ました。それだから甲種になれなかった青年は罪を犯した人の様に小さくなつて暮さなければならなかったのだ。

七月十五日が今の年の徴兵検査の日だった。此の日は成人の日とも考えられて家族も村人もその日からは一人前の大人としての扱いをしたし青年自身も自覚した生活に入る喜ぶべき日でもあったから雪子は末だ夏の朝が明けやらない中から起きて兄の出発を祝う赤飯を炊きお父さんは今夜は町の宿へ泊つて帰らない息子の為に下着や持物など細々と気を配つてやつてゐる

「貞もとう／＼検査になつたか」

その声は我が子の成長を喜ぶ気持と今日からはもう自分の子であつても自分の子ではなくなつて国からのお召しがあれば何時でも出してやらなければならぬ子になるのだという諦めに似た寂しい響きを持つていた。貞治は晩年に恵まれた子であり途中で母親に亡くなられてゐるだけに此の日を迎えたお父さんの喜びも亦寂しさも一層深かつたのである

そんな親の気持などわかる筈もない若い兄妹は甲種合格こそ村の名誉であり一家のほまれであると教えられていたから今日の検査こそは自分を評価してくれる絶対のものだと信じていた

「貞兄 合格したら電報打つてな」

「うんコウシゴウカクつてな、そうしたらその電報仏様の前へあげといてくれ」靴をはき乍らそんなことを言う子供達を叱るわけにもいかないお父さんは、

「大い大丈夫だつぺえ」

と。それは不合格で兵隊にはとられずにすむだろうという意味の大丈夫だった。貞治は小学校へ行く様になつてからは一度も病つたこともなく身長も五尺六寸はあつたし何処といつて悪いところはない様だつたけれど体重は十四貫やつとでどうひいき目に見ても甲種の体ではなかった。それでも兵隊になりたい一心で此の一年間はつい分摂生もし体力も養つて今日を迎えたのである。自分でも百分の自信はないけれど去年の甲種の顔ぶれと比較して九分九厘大丈夫だとも自負していた。自分が出て行つてしまつたら後が困ると思ふけれど一度も病気をしたことのない父親の健康がその心配をかき消してくれたし日本男子と生れたからには一度だけは軍隊の生活がしてみたかつたの

である。狭い村の生活は平凡で刺激のない毎日は不満だつたから階級制度のはげしい軍隊へ行つて自分を価値づけてみたいという青年の夢をかりたてる様に国民精神総動員の運動は国中にゆきわたつた。

「お父つあん電報来ないね□」

「駄目だつたつぺえ」

二人だけの夕食をいつもより早目にすませて火のない炉端で父と娘は別々な気持で待つていた。時々電報配達達の自転車か庭まで乗り入れて来た様な錯覚にとらわれ乍ら夜更けまで待つても電報は来なかつた

「貞兄だけ駄目だつたんだと可哀想だな」

雪子はいろいろの灰に火箸でさつきから「甲種」と書いては消し消しては書き乍らがつかりしている兄の姿を想像していた。今夜の旅館は甲種の人達を祝つて青年達ははじめて酒を許され夜の更けるまで騒ぐのだと聞いていただけにその渦の中から一人だけ取残されてしょんぼりとしてゐるであろう兄を思うと可哀想でならなかつた。

「さあ雪子寝るとすべえぞ」

父親は立ち上ると仏間へ入つて小さく鐘をならして母の霊に何事かを祈つていた。

翌日昼少し過ぎた頃一行は連れだつて帰つて来た。

「貞兄電報どうしてうたなかつたん」

思ひの外元気に帰つて来た兄を迎えてそうなじる様に言う

「第二乙じゃあ電報も打てめえよ。そいだけどな秋までには第一乙は甲種に繰上げられて間違ひなく行けるし第二乙は第一乙になれるから召集令でその中に行ける可能性が強いんだつてさ。赤紙で召集される方が勇ましいぞ」

第一も第二もない五体揃つてゐる限りはみんなかり出されなければならぬ事態にまでなりつゝあることを喜んでさえている貞治は老父と妹を残して遠い戦線で死ぬことのあることを一度でも考えたことがあつたらうか。

それにしても今日のところは末だ安心なのだということが年寄つたお父さんには何より嬉しかつたのである。口には出さなかつたけれどいそ／＼と貞治が好物の精進揚げを汗を流し乍ら自分であげて「風呂も沸いたぜ」と一番先に汗を流させてやるのだった

「甲種にもなれねえ不肖な倅にそんなにしてくれるとてらあ」と頭をかく兄へ

「それでも準甲種だもの我が家の名誉だ」

と雪子は明るく雰囲氣をもちたてた。

秋も過ぎ長い冬も明けて山村に又春が巡って来た時雪子は父と兄を残して再度M市の師範学校へ入学することになった

「二年間だから辛棒して炊事頼むな」

「お父っあんだつて貞兄だつて飯炊きは雪子よりは上手だぞ心配すんな」

今度は行く者も出してやる人も初めての時程心配ではなかった。お父さんにしても貞治を兵隊に送らなければならないかも知れないと思っただけにそれを思えば雪子を学校へやることの方がどれ程安心かしれなかったから明るい氣持で出してやれた。けれども引き続いて五月の初めには貞治にも召集令が来てしまったのである。

「山田さん電報です」

舎監室へ呼ばれて渡された電報には

「ショウシウサル十四ヒタツアニ」としてあった。

「お兄さん御出征ね御苦勞様」

「はい」

「十四日つていうと月曜日ね。それでは土曜日の午後から帰るといいわ」

先生は優しく言つて帰宅を許してくれた。

「山田さんおめでどうこれで私達のクラスに勇士の妹が十一人目よ」

友達是我が級の名誉として喜んでくれたし雪子は待つていた筈なのに少しも嬉しくなかなかった。自分でもおかしい程がっかりして遂に貞兄も遠いところへ行つてしまつてもう何時会えるかわからなくなると思うと寂しかった。其の頃から召集されると数日で外地へ連れて行かれるのが常だったからだ。土曜日には授業が終ると昼食もとらずに宿舎を出た。バスの停留所には床屋へ行つて来たばかりらしい坊主頭の貞兄が迎いに来ていてくれた。

「貞兄とうく来ちゃったのな」

「うんいざ自分で貰つてみると赤紙つてあんまりいい氣持じゃあねえな」

赤紙の方が勇ましくていいぞと言つてから一年しかたつていないけれどその

間に何人もの戦死者が出た。そして血氣にはやる若人達も出征勇士の名誉は無言の勇士に撃がつていることを身近に感ずる様になったのである。それから尚のこと戦死者の名誉を最上のものとしてたたえ、散ることこそ最高の目的であつたと若人達に信じさせるに急だった。

「お父っあんが馬鹿に力を落しちゃうてるらしいんで弱つたよ丈夫だつて言つても六十過ぎだから無理もねえと思うけどな。俺の月給は会社からそつくり来るから経済的には心配はねえけどお父っあんのことを頼むな」

此の三月に運送屋は合同して有限会社となつてお父さんも貞治も月給をいたゞく従業員になつていた。

「お父っあん何か言つてるの」

「何も言はねえし言つてもどうにもなることじゃあねえと思つてゐるだつぺえけど黙つて口息ばかりついてるんだよ」

自分で育てて来た子供でも此の場合「死ぬな」と教えるわけにはいかなかった。力を落していることを露骨に示すことによつて無言の中にそれを言いたかつたのである。然しそれさえも他人の前では許されないことだったのだ。雪子もはじめて兄がいなかった自分の責任を思うともう甘えてはいられないのだと思つた。ぎゅつとひきしめた口許にもその覺悟をみせて我が家への道を兄と並んで歩いた。

翌日は夜明けを待つて二人はそつと家を出た部落から半道程離れた谷川の上流にあるお不動様へ武運長久を祈願に出掛けたのである。一人ずつしか歩けない山の道には新緑の若葉が両方から枝を拡げてさながら緑のトンネルの様に、その緑をすかして朝日が明るく射してくると二人の顔も体もうす緑に染まつた。

「貞兄の顔が青いよ」

「雪子だつて青いぞ」

二人の声が山のしじまを破ると驚いた藪鶯が鳴き乍ら谷間深くおりて行く。明日出て行つたらもう帰つて来られないかもしれない貞兄と一諸に歩く最後の道だつたらどうしよう。あまり美しい朝の道は雪子の不安をかえつて深くした。今のままで世の中の総てが動くことをやめて貞兄と二人で歩く此の道

が何処までも続いて下さいと願いたい気持ちだった。けれど明るい道は間もなく尽きて暗い杉木立の道は二人を現実^{いざなり}に引戻してしまった。小さな□の前に立った貞治は

「出て行つたからには人におくれをとらない様に働くよ。だけどなもう一度だけ帰って来たいんだ、そして三人で一ヶ月でもいいから楽しく暮してから死にてえんだよ」

それは皇国の民でもなければ村を代表する勇士でもない人間貞治の□^{いつは}りのない声だったのである

苔むした石畳の上に二人は並んでひざまづくといつまでも深く深く祈りをこめていた。溪流の水の音だけが二人の心の奥にしみ入る様に聞えて来た。

「留守をよろしくお願いします」

よその部落から集つて来た数人の勇士と一語^{ひとこと}になつてバスに乗つた貞治はやゝ興奮の面持で繰返し頼んだ。

「留守のことは御心配なく頑張つて下さい」

青年団長はバスの窓から顔を出した貞治の手を握つて何回も振り乍ら誓つた。

「お父さんに御不自由はかけませんから」

婦人会の小母さんと女子青年団長も続いて励ました

「村を代表する勇士の親父様に寂しい思いはさせねえから」

新調の国民服を着た部落区長さんは一段と声を大きくして大きな手を差出した。見送りの列の後の方に遠慮勝ちにこんな光景を眺めていた木村先生はバスの運転手が運転台につくとたまりかねた様に人々の間をすばやく縫つて窓の下まで来ると

「皆体に気をつけてね、命を大事にするのよ」

昨日別れの挨拶に来てくれた時も言つた言葉をもう一度言い乍ら先生の眼には涙の露が一ぱいになった。此のバスにゆられてもう何人の若人が出て行つたか知れない。その殆んどが直接に間接に木村先生の教えを受けた人達ばかりだった。その人達の何人が又このバスで村へ帰って来ることが出来るだろう。もう既に此のバスは何人かの白木の箱を乗せて来たではないか。

走り出したバスを追いかけて乍ら村人は万才を叫び続けていたが曲り角から見

えなくなると

「又行つてしまつて寂しくなるなあ」

そう言つて日の丸の小旗を小さく巻き乍ら急に重くなった足を運んでぞろ／＼と帰り道につくのだった。

一人ぼっちになつたお父さんは思いの外元気だった。

「倅が帰るまではまだ／＼頑張らなくては」

と必ず二人前の食事の仕度をして貞治の蔭膳を忘れずに若返つた様によく働いた。村ではもう六十を越したら大きな孫を持つのが普通で平和な時代だったらもう世の中の総べてをなし終つた様に老い込んで自ら老人を楽しむ人が多かつたのにそういう人までが再び若い人に代つて野良へ出なければならぬ時世だったから一人になつたお父さんは若くならざるを得なかつたのである「それでも三年か五年もしたら帰ればえからそうしたらすぐ嫁も迎えなけりやあならねえ」

お父さんはそう思つて会社から来る貞治の俸給は半端の額までもそっくりそのまま無事に帰れる日の為に毎月郵便貯金をして行つたのだった。

その貯金が月々に増え北支へ行つた貞治からは元気な便りが頻繁に届いて戦争は大東亜戦争に突入していた。

二、三通の葉書がまとまつては一ヶ月目位には届いていた戦地からの貞治の便りが翌年の春も終りの頃からぱつたりと来なくなつたけれど部隊の移動でもあつて書けなかつたのだらうと大して心配もしないでいたところがその年の九月も末の頃

昭和十七年五月廿五日山田貞治上等兵北支戦線にて名誉の戦死を遂ぐ

という一番恐れていた通知が末^{すえ}だ何の心の準備も出来ていないたつた一人で住む父親の許へ届けられたのだった。僅か一年で武運短く異国の戦線に倒^{たふ}れたのである。さすがに村人も慰める言葉に窮して

「此の度は誠にどうも……」

後の言葉は口の中だけでつぶやいて俄造りの新しい仏壇に飾られた二つ星の日の貞治の写真に黙礼してはこそ／＼と帰つて行つた。

其の夜悲しみの余り眠れない父が一晚中かかつて書いた便りが寄宿舎の雪子

の許へ届いたのはそれから二日目の午後だった。三時までの授業が終って寄宿へ帰った生徒達は自分宛の来信はないかと必ず舎監室の前の□示板を見に行くのである。封書の欄に自分の名前を認めるとカバンを廊下の隅に置いて当直の先生のところまで受取りに行つて来た。それは父からの便りだった。何となく乱れているその表書きは直観的に不安なものを感じさせて次々に掲示板の前へ集つて来て一ぱいになった人達をかきわけける様にして袍を拾い上げると急ぎ足に自分の部屋へ帰つてハトロン紙の封を破り捨てて変態がなばかり使つて書かれた読みにくい父の手紙をくい入る様に読みはじめた。

雪子 五月廿五日に貞兄が戦死したという知らせが今日役場からありました。僅か一年しか御奉公出来なくて死んでしまったことが本人もどんなに残念だったと思います。男として此の上ない死場所を得たのかも知れないけれど生きたいと願うのが人間の自然の姿なのだし、死の直前にはやつぱり家のことを此の親父や雪子のことを考えたであろうと思うと凡人である父は意気地なく泣けそうになります。

ところ／＼父の涙でにじんでいる手紙の上に雪子の涙が又新しいシミをつくつて末だその先のある手紙をもう読み続けることが出来なくなつてしまつた。その間に同室の下級生も二人帰つて来たので雪子はそつと涙を拭くと戸棚の中の本立から行進曲集を抜き取つて読みさしの手紙をその中にはさむと逃げる様に部屋を出て一番人通りの少ない北側の廊下を歩いて誰もいない講堂へ入つた。こらえていた涙が堰を切つた様に流れて入口に近い椅子に崩れる様に腰を下すと声を出して泣きじゃくつた。今までも兄さんの戦死の知らせを受けた友達が雪子のクラスだけでも二人あつた。けれどその人達は悲しみを隠して人前で涙など見せはしなかった。お国の為に死ねたのを悲しめることは恥づかしいことだったのだ。貞兄を送つた寂しさにもなれると次々に元気な便りが届くのでその兄の死ということを本気で考えたことなどは今まで一度もなかったし、貞兄だけはきつと元気に帰つて来ると信じていた妹だった。そんな虫のいい妹を戒しめる様に兄の死は余りにも突然だった。お国の為だなどという理性は全く忘れて泣き叫んで憤りたい気持ちを辛うじて抑えて三時半から四時半までの一時間今日は講堂のピアノが雪子の練習時間に当たっていたのを幸に講堂へ逃れて来たのだった。漸く涙を納めてもう一度父

の手紙を開くと又悲しみは深くなつて講堂の窓からはいつまでもピアノの音は聞えなかった。明日はピアノの検閲を受ける日だったから貴重な練習時間である筈なのに時間の経つなど全く忘れて泣き沈んでいた。その時講堂の外に足音がして静に入口のドアを開いて入つて来たのは雪子の後の時間を割り当てられている近藤さんだった。

「あらもうすんだの」

何時もならもう一回だけね、此処がどうしてもうまく弾けないのよと腕時計をにらみ乍ら時間ぎり／＼までピアノから離れたことのない人がしょんぼりと座っているのに驚いた様子であつた。雪子の方は尚慌てて払げてあつた手紙を急いでたたみながら

「ええ」

と小さく返事をして泣き顔のやり場に困つていた
「どうなさつたのよ嬉しいものを持つて来て上げたのに。はいいいものでしょう」

何が原因で泣いているかは知らないけれどこれを見せて上げたらきつと喜んで機嫌をなおすことを知つていた近藤さんは妹をいたわる様に雪子の前へ差出して見せたのは軍事郵便のはがきだった。然も貞治からの……

「ね、こんな嬉しい人からおはがきが来ていたのに知らないで練習に來ちやつたのね」

「？……」

それは間違いもないなつかしい兄の筆跡だった。父からの封書だけを受取ると廊下の状差しに自由に取つていくように出ている葉書の方は調べないで来てしまったのを後から近藤さんが取つて来てくれたものであることはわかるけれど今の今まで兄の死を悲しんで泣いていたのにその兄からののはがきが今日届くとは……

散るを惜しむは桜を愛する所以に非ざるべし一陣の春風に千片亦万片惜しげもなく枝を辞して空に香雪を溺らし地に錦洲をしく。さくらは散るさまこそ最も愛すべけれ。これは誰かの言葉だったね。北支戦線も多難で今後ずつと御無沙汰する様になると思うが小生至極元気で事あつた時には何時でも桜の花の様に雄々しく散つてゆく覚悟が来ています年とつたお父さんに兄の

分まで孝養を尽して下さい

いくさ神岩佐の如く我もまた

時来りなば雄々しくぞ散る――

葉書にはそうしたゝめてあった。もう一度表へかえすと五月廿三日と日付が記してあった。廿五日に戦死したとすればその二日前に書いたことになる。それから今日まで何処をどう迷^{まよ}つて来たものやはがきには雨のシミの様なのがところ／＼についていた。その文面によれば死ぬことを知って書いたものと思はれた。それは誰に見られても恥づかしくない修身の本にでものせたい程立派な手紙だったけれど何と空々しい文句かと感じられたことが雪子にはかえって悲しかった。検閲を恐れての言葉か或はこう書くことによって自分の気持を整理したものか、その文面の蔭に切実に言いたかった言葉が沢山あったのだろうと彼女にはわかるだけにたまらなかった。

「さくらは散つても春毎に又咲くけれど人間は二度と生きられないのですもの同じに考えちゃあいけないと思うのよ」

側から覗き込んでいた近藤さんはこんなことを言った。七月の末の頃近藤さんも兄さんの戦死の報を受けた一人なのである。此の人だったら二ヶ月も前に密かに同じ悲しみに泣いた人だと思つたから雪子はそつと父の手紙を差出してみせた。読み終つた近藤さんの眼からも大粒な涙が光つて落ちた。

「そうだったの……」

それ以上は言うことが出来なかったけれど遠い異国の戦場に兄を失つた悲しみは何も言はなくても二人の妹同志の心には通じていた。やゝしばらくして近藤さんは立ち上るるピアノの前に座つて忠霊塔の曲を静に弾きはじめた。一回ひき終つて尚繰返し同じ曲をひきはじめた時雪子は近藤さんの後に立つてピアノに合はせて歌つた

晴れた青空 すすきの丘に

高くそびゆる 忠霊塔

サラリサラサラ 風吹けば

草の葉蔭に 虫の声――

二人の顔に涙のあとが幾筋も出来た

初秋の日射しは西へ傾いて講堂の西側に高く伸びているポプラの葉が夕日を

受けて美しかった。何処かの枝でとぎれ勝ちに鳴く生き残つた日ぐらしの声も物哀れに――

やがてぱたとピアノの蓋を閉じた近藤さんは

「死ぬのなんて馬鹿よ。若い人達がどん／＼戦場へ送られて消耗品みたいに次々に命を捨てていったらしまいにどうなるのよ!!」

はき出す様に言うのと両眼からポロ／＼と涙がこぼれた。けれども二人は泣き声はたてなかった。二人だけの此の部屋でだけ言うことを許された悲しい怒りの言葉だった。

揃いの単衣

「お父つさん末だ帰らねえのかい」

「うん三号車が戻るまで湯でも沸かして待っていべえ」

「三号車は俺達が帰る時峠で出会つただから今日は遅いよ夜中かも知れねえ」

「そうか寒いのに御苦労だな」

「それじゃあお先に、お父つあんも早く帰つて寝た方がいいよ」

「あゝおやすみ」

若い運転手と助手が帰つて行つた後は事務室に貞治の父親だけが一人取り残されていろいろの炭をつぎ足していた。事務室といつても入口の土間をカウンターでしぎつた板の間に粗末な椅子と机が三脚おいてあるだけで机の上にはインキ壺や伝票が雑然とおいてあった。その奥の六畳が応接間でもあり従業員のたまり場でもある。琉球表の畳がもう大分くたびれていた。此の事務所はもと山田運輸の看板をかけた貞治の家の店だったのだけれど郡下の運送屋が合同して会社となつてからは此の店はそのまま此の地区の出張所となつて貞治も父親も従業員として勤める様になったのだけれど勤め人という気持には少しもなれなくて車も人も事務所も可愛かった。貞治をはじめ若い従業員は次々に出征し調子のいい車は徴発令で持つていかれてガソリン車は木炭車にかえられた。材木や木炭を積んで峠を越して町まで運ぶ車に力の弱い木炭車では無理なのである。昼前に積み込みを終つて村を出ても峠を登るために骨が折れて思はぬ時間を費してしまう事が多かった。二台しかなくなつたガ

ソリン車が先になつてロープで引つ張つたり後から来たバスの乗客が全員降りて後押しをしてくれたりそんなことまでしてみんなで力を合はせたかつたら狭い道は先へ通り抜けることも出来なかつたのだ

貞治の戦死の報がはいつてからは夕食の陰膳に温いものを供えてやろうと思う張合いもなくなつて何時までも事務所に残っていることが多くなつた。黄色くなつたカーテンを半分だけ閉めていろり端で末だ帰つて来ない車を待つていると自分の店だつた日に貞治の帰りを待っていた時と同じ様な楽しい気持ちになれるのだつた。宿はづれの木橋を渡つて来る音が聞えて来ると立ち上つて表へ出てみる習慣だつたから静まりかえつた村のはづれから何時その音が聞えて来るかと耳を澄ましている時だけ貞治の死を忘れることが出来た。ガタ／＼／＼／＼ 橋板をならしてくる音がする

「やれ／＼やつと帰れたか」

立ち上り乍ら覗いた柱時計はもう十一時を過ぎていた。父親が入口の戸を開けたのと車が停つたのとが一諸だつた

「御苦労だつたな序に車庫へ車をしまつちまうといい」

助手だけが降りて来て車はバックで車庫へ入つた。エンジンの音が止んで運転台のドアを閉める音があたりの冷たい空気を震はせて大きく響いた。

「お父つあん末だ待つてくれたんかい全く今日つていう今日はやんなつちやつたよ」

「どうしても今日中に貨車へ積み込まなきゃあならねえ軍の材木だからつてちつと無理して積んだからな」

「後からも前から誰も来ねえじゃあねえかなあ立往生だよ」

「泣きたくなつたな」

二人の運転手と助手はかわるがわる峠の道の骨折りを話し乍ら靴のままでいろりに足を入れて腰を下した。

「そうか／＼御苦労だつた あんまり遅いから大方そんなことだと思つて心配してたよ」

お父さんがくんでくれた熱いお茶をおいしそうに飲んでやつと人心地がついたらしい二人は戦闘帽と軍手を脱いだ

「それでもなあ末だ雪がねえからいいけれど正月過ぎると雪が降るぜ」

「そうなつたら江りやあがるしどうなるだ。思いやられるなあ」

「それまでこんなところへおいてくれやあしねえよ。雪の降る日は新兵さんさ 心配するな」

「そうゆうわけだハハ……」

大きな声で笑つただけで何となくその笑いには力がなかつた

「さあお父つあん帰るべえ遅くまで悪かつたねえ」

若い者はバタ／＼と靴についた灰を落すと両足を上げて両手で体を浮かす様にして器用に土間へ下りた。お父さんは火の始末をして大きな鉄瓶に水を入れてその上にかけると電灯を消して手さぐりで戸閉りをした。十一月の夜気は冷たく思はずジャンバーの衿をたてて自転車車のハンドルを握つた。カタ／＼と音をたててそれ／＼違つた方向の家路へついた。電池の古くなつたライトはぼんやりと石だらけの道を照してお父さんは待つ人もない真夜中の家へ帰つて行く。富山の風邪薬さえも飲んだことはないと健康を誇つて来たお父さんもこのところ急に老いこんでペタルを踏む足も力なく哀れだつた

村の冬は駆足でやつて来た。お正月も真近い日に村役場へは又召集令がどつと入つて運送会社の従業員も五人までその中に含まれていた。正月七日の午後配給の酒で社内の壮行会があげられた後で

「みんな俺んどこへ来ねえか。配給の酒ぐれえあるぞ」

お父さんは日の丸のたすきを掛けた勇士を我が家へ連れて行つた。正月の休暇で帰つて来ていた雪子が今朝一番のバスで又寄宿舎へ行つてしまつた寂しさを紛らしたい気持ちもあつたかも知れない然しそれよりも血気にはやつて自ら敵弾に体当たりもしかねない此の若者に何か言つて聞かせなければならぬ様な気がしていて仲々うまく言い出せないままに家まで招いて来たのだつた。いろりの火がぱち／＼と燃え上ると家の中は急に明るく賑やかになつて先刻冷で飲んだ酒が漸く此の頃になつてまわつて来たらしく若者達の眼元が桜色にあからんで来た。

「戸棚の中にある物は何でも出してな。今夜は元気をつけてくれ」

勝手元からとつておきの一升瓶を出して来ながらそんな風に気易く言つてささやかな送別の宴を楽しいものにしてやりたいと心を配るのだった。

「お父つあんずい分御馳走があるじゃあねえかい」

「ずい分もねえけどあるだけは食って行ってくれよ」

戸棚から取出された正月料理は雪子がつくって出来るだけ見た目に美しくとあるだけの材料で工夫して盛りつけて行つたものだった。飲む程に酔う程に若者達の意気はあがつて

「お父つあん俺だつて男だよ命なんか惜しかあねえから立派な働きが出来る様に拜んでてくだいよ」

「会社の名に恥じねえ様に先に行つた貞兄の名をけがさねえ様にきれえに死のうぜ」

本当の死に末^マだ直面していないから言えた言葉には違いないけれど此処まで来てしまつた国家の危急を救う者は此の若い肉体を正面からぶつつけて行くこと以外にはないではないか、国の為だったら喜んで死ぬぞと若い純粹な氣持で考えていたのだ。然し理性ではどんなに死を覚悟していても生きようとする若く逞しい肉体が何でそれを望む筈があらうか。そこに大きな矛盾があり苦しみがあつた。その苦しみを忘れる為に軍歌をうたつては酒を呑んだ

「皆なあ 俺の言うことをよく聞いてくれよ。死ぬのだけが忠義だもんか二つとねえ命を粗末にしちゃあならねえぞ、生きて帰つて来ることを考えて行つて来いよ。生きて来て又栗山峠と取組んでくれ^マその方がどれだけ国のため^マだかわからねえ」

お父さんは死ぬなと教えたかつたのだ。貞治には教えられなかつたことをこの若者達にだけは言つて出してやりたかつた。その声は小さかつたけれど限らない愛情がこもつて一語一語若者の胸に響いた。一座は一瞬しゅんとして誰も年寄の繰言をと笑う者はなかつた。解ききれぬ心の矛盾を言い当てられた様な緊張をさえ覚えたのだつた

「何かの時にはな お父つあんの言つたことを思い出して体を大事にやつて来てくれよ。何もなかつたけえとこれでおつもりだ」

最後の一杯を注いでやり乍らお父さんの顔は言いたい事を言い得た安心感に満されている様だつた

「お父つあん色々ありがとうございます。お父つあんも体を大事にして待つてくだいよ」

「うん／＼待つているとも泊めてやりてえけえとあと三晩だけ自分の家へ寝ていけ。それが親孝行だぞ」

門口まで送り出したお父さんは若者達の姿が闇の中に消えてしまふまで見送つていて動かなかつた。急にひっそりとした家の中には軽くなつた鉄瓶がしゅん／＼と煮立つ音だけが聞えて食べ散らした井や小皿がころがつているのも寂しかった。炉端に帰つて来た^マ

お父さんはごろりと横になると急に酔が出て来たらしく

「死んじやあならねえぞ」

「死なれてたまるもんか」

足と頭をちぢめて半分眠り乍ら時々口の中でつぶやいていた。遠くから若人達の唱う軍歌が冷たい木枯しに消され勝ちに聞えて来た。

此の冬さえ越して春が来れば雪子が卒業出来る。そうしたら村の分教場へ勤めさせて貰えることになっていた。それだけを楽しみにどれ程待たれたか知れない春が漸く訪れた。雪子にしても同じことで寄宿舎の窓をならす赤城おろしにふと眼覚めてもお父さんは今頃どうしているかしら、夕飯も食べないで末^マだ事務所にいるのではないかと案じられた。器用で手まめな父親は針仕事でも炊事でも女の人よりはむしろ上手だつたし家の中も小ざつぱりと掃除してそれを少しも億劫がらずによくやる人だつたから遠く離れて暮していても貞兄が戦死するまでは一度だつて心配になつたことはなかつたのに……兄の戦死から何をする氣力もなくなつた人の様に食事もしたりしなかつたり你的生活らしい事を知つてからは何かにつけて心配になつた。以前の雪子だつたらそのまま修学を続けることなど出来なかつたに違いないけれど兄の亡い後は老父を助けて自分が生活の中心にならなければならぬと思えば悲しいから心配だからと学業を捨てるわけにはいかなかった。同じ悲しみに絶え^マ乍ら父と娘が離れて暮した半年はどれ程長かつたか知れなかつた。そんなに待つた卒業式にもお父さんは出席されず、何処が悪いということもないが氣分が重いから家で待つているからということだつたので何か案じられて学園に名残りを惜しむ暇もなくその日の中にあたふたと帰つて来た雪子を迎えた父親は僅かの間に急に老い込んでその眼には少しも輝きがなかつた。色々な想い

を雪子はどう表現してよいのかわからなくて

「お父っあん……」

と呼びかけるなりもう後は涙だけが溢れて父の側近い炉端に泣き崩れてしまった

「……」

お父さんにしても何か言ってもやりたかったけれど言葉にしたらず泣けて来そうでも何も言えず涙で曇って来た眼を大きく見開いていたが黙って立ち上ると六畳の仏間へ入ってお燈明をつけると雪子が帰ったことを母と兄に告げる様に香煙にくすぶった小さな二枚の写真をじつと見つめていた。何時の間にか父の後へ来て深く首を垂れて卒業の報告をしている雪子にも気がついていないかの様に……

喜びと悲しさと寂しさの交々の感情を漸く静めることの出来たらしいお父さんは

「よかつた／＼お母も貞兄もどんなに喜んでるか知れねえぞ」

そう言つて仏壇の前に供えでもした様に置いてあつた唐草模様の風呂敷を開いた。

「紋付と袴を木村先生に縫ってもらつておいたからこれを着て貞兄に見せてやつてくれ。その中に先生も見えるわけだから今夜は久し振りに一諸に飯を食べて貰うべえ」

風呂敷の中には紫ちりめんの紋付と紺サージの袴が折目正しくしまわれてあつた。

「そんなのつくつてくれなくつたつてよかつたのに」

「それでもな雪子が卒業した時にはつくつてやつてくれつて出ていく時まで貞が言つていたことだつたからさ」

そう言つてお父さんは早くも襷糸を抜いてはその抜き糸を母親がよくした仕ぐさを真似て器用に口に持つていった。

「それ着てみる」

軍服姿の貞兄の写真は雪子の晴姿にそんな風に声をかけたかつたに違いない。それだのにもう何も言えない人になつてしまつたのだと思ふと又涙がこみ上げて来そうなので

「貞兄ありがとう 似合う?」

少しおどけて仏間をぐる／＼と歩いて見せた其の時表に足音がして

「雪子ちゃんお帰りになりましたか?」

木村先生の弾んだ声に父と子は

「はい」

と一諸に答えて顔を出す

「あら、よく似合うこと。いいわーすてき、すてきよー山田先生」

その言い方が嬉しくてならないという様にいたづらっぽかつたので三人は久し振りに心から明るく笑い合つた

「さあ／＼雪子先生に上つてもらつてな。お父っあんが上手に赤飯を炊いておいたから。今夜は飯を食い乍ら話さなけりやあならねえ大事な話もあるし」
言い乍ら早くもお父さんは勝手元へ行きかけたが勝手口の柱につかまつて動かないと思ふと「うう……」と呻いて板の間へ座り込んでしまつた

「あッお父っあんが」

「どうしました」

お父さんと雪子が慌てて駆けよつて助け起そうとした時にはもうお父さんは口をきくことが出来ないらしく何かを言いたげに口を動かそうとしては情なさそうに顔をゆがめて泣くだけだつた。雪子は余りの驚きにどうしてよいかわからずただおろ／＼と

「お父っあん しつかりして、しつかりして」

と声を限りに呼び続けた。木村先生にせきたてられて漸く布団の上へ寝かせ近所の人を頼んで自転車で医者を呼びに走つて貰つた

「お父さん今お医者さんが見えますからしつかりしていらつして下さい」

子供をなだめる様に静に言つて枕元近く座つた木村先生を見てお父さんは何かを言いたそうに悲しげな表情でもがくので驚いてとんで来てくれた隣りの小母さんが

「言いたいことがあるともさ。それが言えないなんてせつねえなあ。先生に何か言いたいから雪子ちゃん紙と鉛筆を持たしてやつたら」

袖口で涙をふきふきそう言うので雪子は机の引出しから古いノートと鉛筆を渡してやるとお父さんは苦しそうな中から最後の力をしぼり出す様に真剣に

鉛筆を持って雪子が持ち添えているノートの上へやつと判じよむことが出来る様な力ない文字で

せんせ ゆきこはいもうと

とそこまで書くともうそれだけで力尽きて鉛筆を落してしまった

「ええ ええ 妹だと思つて仲よくしていきますから」

木村先生が大きな声で耳許で答えたのだけれどもその声もよく聞えない様に眼を閉じると深い昏睡状態にはいつてしまつて漸く医師が駆けつて何本も太い注射をしても感じない様に医師に手を取られて息を引きとつてしまった。病名は脳溢血だった。平常から血圧が高くて自分でも気をつけていたのだけれど貞治を亡くした心の痛手は血圧を一層亢進させて死を早めたに違いない。それでも雪子が卒業する日まで精一ぱいの努力をして生きていてくれたのであろう。せめて雪子が本当に山田先生になつて分教場へ通う姿を見届けるまでお父さんだつて生きていたかつたであらうに。

余りに突然の出来事に泣き悲しんでいることも許されるさゝやかな野辺の送りを済ませると初めて本当に一人ぼっちになつたのだという言いようのない寂しさが腹を切つた様におし寄せて来た

一人っ子だつたという父には近い親戚もなかつたし母方の縁者も母の死後は日と共に疎くなつて頼つていける人もなかつた。

「一人になつて泣きたいだけ泣くといいわ。悲しさを涙で洗い流してしまつて又元氣を出すのよ昼過ぎに又来てみるからね」

子供がないので隣りの小母さんと交替で泊りに来てくれた木村先生はそう言いおいて学校へ出掛けて行つた。今日は来年度の受持が発表になる日で雪子は分教場よりも本校へ勤務してほしいと校長先生が言つていられたというので氣になつていたのである。

どれだけ時間が過ぎたのか知らないが雪子は泣き疲れて久し振りにぐっすり眠つてしまつたらしい

「雪子ちゃん」

木村先生の呼ぶ声ではじめて眼が覺めた。数日來の寝不足を取戻した頭の中はさえずりと軽くなつたおおいだつたけれど泣きはらした瞼は未だ赤くはれていた。

「あらもう何時頃でしょう。何も知らないでぐっすり眠つてしまいましたわ」

「そう眠れたらよかつたわ外はとっても春らしいいいお天気よ」

「目覚しに角屋のおまんじゅうを買つて来て上げましたよ」

「すみません。嬉しいわ」

雪子はいそぐといろりの火を炊きつけて鉄瓶をかけた。

「お茶が沸くまでお父さんに上げておきましょうね」

木村先生は包のまま仏壇へ供えると炉端へ帰つて来て

「雪子ちゃん分教場にきまつたらしいわ」

「よかつた うれしいわ」

「師範出を分教場へやるのは惜しいつて反対だつたらしいんだけど分教場で存分に働いてみたいという雪子ちゃんの希望をやつと通して下さつたようよ」

「主任の先生は？」

「今まで通り伊藤先生ですつて。いい方だから安心したのよ」

「わたしの時には主任さんも誰もいない一人ぼっちだったんですね。然も十九だつたのよどんなことをしていたのかと思うと恥づかしくなるけれどそれだけに何にも怖くなくつて思う通りのことをどん／＼実行出来たわね」

木村先生にとつて分教場で暮した一年間は楽しい毎日だつた純粹な熱情を傾けて誰はばかるところなく理想の旗を振りかざして教育道に進進出来たのだつたけれど其の結果は部落から追はれる身であつた。あれからもう十数年を経てその間にずいぶん色々なことがあつた其の度に世の中というものを知らされて知らない間に世渡り上手な人間になつてしまつていた。

「木村先生の若い時は始末に困つたけれど此の頃大人になつて円満になられたよ」

若い時からずつと一諸だつた教頭先生は述懐する様に言うけれど木村先生はその度に寂しい氣持で苦笑せざるを得なかつた。円満になつたのではないずるくなつたのだのにそれさえ人々はいい先生になつたと褒めたたえる。雪子も亦自分と同じ様な道を辿つてやがていい先生になるのかと思うと寂しい氣持がしてそれなら今の中に世の中つてこんなところよと教えてやる方が親切なのかも知れないけれど自分自身で知るまでは教えたくなかつた。雪子は又雪子なりの人生を築いてゆくであらう遠くから見守つてだけはやるけれど

と初めて実社会に出て行く子を亡き人々に代って祝福してやりたいと思っていた。

「新式の日和服にしたら。袴がとてもよく似合つてよ」

「あ、袴って言えば此の間びつくりして脱ぎ捨てたまんまよく畳みもしないで風呂敷の中へまるめこんだつきり」

雪子は初めて思い出して納戸の戸棚から此の間放り込んだ風呂敷を出して来た。「あらあら いい着物が泣いてるわ」

二人は風呂敷のまま座敷まで持つて来てたみ直そうとした時大きな風呂敷の中には紋付と袴の外に未だ何か残っているのに気がついた。

「あら？これ何でしょう」

それは叮嚀に包んで糊付けまでしてある紙包だった急いで開いてみたたん「あら」

「まあ」

二人は顔を見合はせて次第に複雑な表情になって行つた。其処にあらはれたものは雪子が一年生になった年の誕生日のお祝に木村先生が縫つて上げた単衣ともう一枚同じ柄の一つ身の単衣だったのである付紐には成田山のお守札までがついたままで樟脳をきかせてきちんとしてしまわれてあつた。それでは雪子ちゃんは妹だったのか。ずっと前からそうではないのかしらと思つたことは何回もあつた。雪子も木村先生から何べんも行方不明になつた妹さんの話を聞いて若しかしたら自分がその時の赤ん坊だったのではないかと考えたこともあつた。けれどもこうして揃いの単衣を二枚並べられると姉よ妹よと手を取ることも出来なかつた。紋付と一諸に此の風呂敷に包んでおいたということはあの日に二人の前で話すつもりであつたのかもしれない。そう言えば大事な話があると言はれた言葉が思い出されて来るし、倒れてから文字に書いた「せんせ ゆきこはいもうと」というあのだどくしい文句も単に雪子を妹の様に面倒見てくれというだけの意味ではなくて雪子の身の上を告白した言葉だったのであろう。二人は黙つて一枚ずつを取り上げて膝の上に置くとじつとして別々な事を考えていた。

震災の時東京へ葉を探しに行つて大変なめにあわされたと一度聞いたことがあつたけれどそれではあの時妹だけが助けられて今日まで育てられていたの

だったのか……。

一人ぼっちになつたと思つていた時大好きな木村先生が本当のお姉さんだったなんて、それは嬉しいには違いなければどんなに優しくお父さんやお母さん、仲良しだった貞兄と親でも兄でもなかったという事の方がどれ程寂しいかわからなかつた

「これ先生見なかつたことにします」

そう言う先生にはかまはず雪子はさつさと元通り紙に包むと怒つた様に立ち上つて仏壇の前へ座つて何事かを何時までも祈つていた。驚いた様に雪子のそんな動作を眺めていた木村先生も続いて立ち上つて雪子の後に座ると「妹をこんなに可愛がつて下さつてありがとうございました。何時までも貞治さんの妹にしておいてあげて下さい」

手を合はせて心の中でそう願ひした。

其の時トントントコトンと街道から太□の音が聞えて来た

「あら春駒よ」

「わあー今年も春駒が来たのね。貞兄は春駒がとても好きだったのに……」

二人は何事もなかつた様に素直な気持でそんなことが言えた。遠く近く聞えて来る太□の音は様々な思い出を呼び戻してくれてもうじつと座つてなどいられなかつた

「先生錢も包んでもいいでしょうか」

「ええ貞治さんに春駒の歌を沢山聞かせて上げなさい」

風もない早春の午後、何処かで今も多勢の戦死者を出しているのかもしれない。けれども出征勇士を送る万歳の声もない村の午後は戦争など遠い国の出来事の様で静で春駒の歌声は平和の春を呼びながら近づいて来た。

九 「春駒」の推敲過程(三)

宮川ひろの未発表作品「春駒」の現存稿のうち、二〇二二年二月に発見された全四九枚(原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.190」から「No.239」まで)に記された、作品第八章、第九章の本文の最終形態を前節に示した。原稿はブルーブラックインクで記された清書稿であり、推敲は清書時と同じブルー

ブラックインクによるもののみとみられる。前稿で紹介した第三章から第五章までの推敲と同様に、第八章と第九章の推敲は、書きながら同じ筆記具で行ったもの、あるいは清書直後に同じ筆記具で行ったものであると考えられよう。あとで漢字を補うつもりでルビを振ったと見受けられる空欄が、手入れされずにそのまま残されている点も第三章から第五章までと同様で、清書後に改めて原稿を見直して整えたというわけではない様子がかがわれる。以下にその推敲状況を示す。提示の仕方は、次のようにした。

○ 前節に提示した本文の、相当する箇所のパージ数・行数を示す。ページ数は、各ページの左下方または右下方に付された漢数字のものを示した。行数は、章題や行あき等も数えて示した。

○ 推敲箇所の直前直後の必要最低限の本文を引用し、手入れを行っているところを括弧「」で括って示す。括弧「」の中には、まず清書時の最初の形態を記し、そのあとに「↓」で推敲後の最終形態を示す。

○ 推敲の提示の仕方の例を以下に示す。

・「三↓四」は、最初は「三」と記していたところを、「四」に修正したことを表す。

・「(ナシ)↓いたし」は、最初はなかった言葉「いたし」を、推敲時に書き加えた、という意味になる。

・「力強い↓(ナシ)」は、最初は「力強い」とあったが、これを削除したことを表す。

(一)「春駒」本文第八章「貞治の出征」の推敲

一七頁下段29行目 成績順位を「報↓(ナシ)」児童に報告し「た↓て」

一八頁上段21行目 大てい大丈夫だつぺ「い↓え」

一八頁上段22行目 兵隊にはとられずにすむだろ「と↓う」という

一八頁下段2行目 軍隊へ行って自分を価値づけてみた「(ナシ)↓い」という

一九頁上段22行目 友達是我が級の名譽として喜んでくれた「けれど↓

し」雪子は「(ナシ)↓待っていた筈なのに」少しも嬉しくなんかなかった

一九頁上段30行目 赤紙の方が勇まし「いと↓くて」いいぞと

一九頁下段21行目 一人ずつしか歩けない山の道「は↓に」は新緑の若

葉が

一九頁下段30行目 貞兄「の↓と」二人で歩く此の道が

二〇頁下段17行目 貞治からは元気な便りが「(ナシ)↓頻」繁に届いて

二一頁上段4行目 当直の先生のところまで受取りに行つて「差出人と当人との関係を告げていたゞいて来ることなつていた。↓来た。」

二一頁上段24行目 貞兄を送った寂しさにもなれる「て↓と」

二一頁上段26行目 貞兄だけはきつと元気に帰つて来る「も↓と」信じていた

二二頁上段10行目 検閲を恐れての言葉か或「る↓は」こう書くことによつて

二二頁下段3行目 やがてば「つ↓た」んとピアノの蓋を閉じた

(二)「春駒」本文第九章「揃いの単衣」の推敲

二三頁上段16行目 車はバックで車庫へ入った。「運□↓(ナシ)」エンヂンの音が止んで

二三頁上段24行目 二人の運転手と助手は「よ↓か」わるがわる

二三頁下段20行目 お父さんは日の丸「を↓の」たすきを掛けた勇士を

二四頁上段23行目 解ききれぬ「(ナシ)↓心の」矛盾を言い当てられた様な

二四頁下段12行目 「此の冬↓(ナシ)」

二六頁上段13行目 お父さんだつて生きていたかった「に違いない↓であらうに」。

二七頁上段15行目 誕生日のお祝に「(ナシ)↓木村先生が」縫つて上げた

二七頁上段19行目 妹さんの話を聞いて「いる↓若し」かしたら自分が

二七頁上段21行目 けれどもこうして「(二字不明)↓揃」いの単衣を二枚

十 「春駒」と宮川ひろの児童文学

ここまで本稿では、宮川ひろの未発表作品「春駒」について、前稿に引き続いて第八章「貞治の出征」と第九章「揃いの単衣」の本文紹介を行うとともに、推敲状況を示したが、二〇二四年一月現在、所在が明らかになつてゐる「春駒」の原稿はこれですべてである。所在不明の第五章の末尾、および第六章「将来の希望」と第七章「師範学校」の原稿が今後発見されることを期待しつつも、発見の可能性が高いとはいえないという認識のもと¹⁾、最後に「春駒」の現存稿は宮川ひろの児童文学の研究にどのような情報を提供するものなのか、原稿の確認を通して見えてきたことを簡潔にまとめておく。

(一) 原稿の整え方からわかること

「春駒」の現存稿は、二〇二二年の二月に発見されたものも含めて、B4版四〇〇字詰め原稿用紙全一八二枚であるが、製造元等の記載もない、ありふれた茶色罫のその原稿用紙からは、執筆時期等の情報は得られない。また、筆記具の種類からも、執筆・推敲時期に関する情報は、一九七五年以前²⁾という程度しか得られない。ただし、宮川健郎氏の証言によると、「春駒」現存稿の原稿用紙と筆記具は、「春駒」第八章、第九章の原稿と同じ箱に入つていたという『夜のかげぼうし』(講談社 1978年)、『東京へ帰る日まで』(同前 1985年)の先駆稿と思われるもの。全296ページ³⁾(前掲、宮川健郎氏からの二〇二二年三月一日付Eメール)と同じであるという。両者は、さほど離れていない時期に執筆されたと考えてよいだろう。その時期とはいふのか。原稿用紙と筆記具から推察できることはないが、原稿の整え方から見てくることがある。

まず、「春駒」の現存稿がインクで丁寧に書かれた清書稿であること、表紙に作品名のみならず「北区西ヶ原三の六〇／宮川ひろ子」と記されていることから、宮川ひろが「春駒」の原稿を他者に読んでもらおうとしていた様子がうかがわれる。「春駒」の原稿について宮川ひろ自身は、一九五三年頃に壺井栄『二十四の瞳』に触発されて書いたもので、壺井栄に見てもらいたいと思つて依頼の手紙を送つた、と説明しているが、「表紙」を付し

た清書稿を束ねて整えたのは、壺井栄に原稿を送る準備だったと解釈できるだろう。「表紙」に記載された住所は、宮川ひろが一九五〇年一二月から一九五九年五月まで住んでいた家のもの⁵⁾であり、一九五三年頃に「春駒」を書いたという証言や一九五四年に壺井栄から返信が来ているという事実と矛盾はない。「春駒」の「表紙」や原稿の状態は、この作品の執筆に関する宮川ひろ自身の発言を裏付けするものといえよう。

そして、「表紙」のあとに「梗概」を記していることから、作品の投稿等も考えて原稿のまとめ方を調べた可能性も浮かび上がってくる。もちろん、自ら思いついて「梗概」を付したとも考えられるが、一九五三年から五四年にかけての時期に、作品投稿等に関してどのような情報があつたのか今後確認することで、そのあたりは明らかになるだろう。児童文学作家を志す以前の宮川ひろが自らの創作物の発表の準備をどのようにしていったのか、その行動の一端を探る材料を「春駒」の原稿は提供している。

(二) 推敲状況から推察できること

「春駒」現存稿の推敲の行われ方からは、次の三つのことが推察できる。一つめは、現存稿の成立前に、かなり整つた草稿があり、それを書き写したのが「春駒」現存稿だったに違いないということである。第四章「運動会」の次のような推敲は、それを裏付けするものといえよう。引用は、清書の状態を視覚的に再現するため、原稿用紙と同様に一行二〇字とし、二重取り消し線も記述されたとおりに示した。

(前略) の心は得意さに躍つた 二回目も音をさせない様に堆肥をつめていと眼をこす
 雪子早えな⁶⁾ 乍ら貞兄が起きて来た。それでももう野良着に着替えている。

「雪子早えなあ ちつとも知らなかつた」

「雪子早えな」と書きかけて削除しているが、ここからは、草稿を書き写した際にうっかりと二行先に記されていた「雪子早えなあ」に目が行つてそれを写してしまい、すぐに気づいて削除したという状況を見て取ることができるだろう。これは、改行も含めて形が整つた草稿を写しているからこそ起

こるミスであると考えられる。「春駒」は長編作品であり、草稿の存在は当然ともいえるが、そのまま視写することができる程度に整った草稿が確かに存在した証を推敲の中に見出すことができる。

推敲の行われ方から推敲できることの二つめは、宮川ひろは当初は「春駒」の発表を真剣に考えていて、清書後にも原稿を見直して表現を練っていたが、作品前半の推敲を終える前に発表を諦めてしまったのではないかということである。「春駒」現存稿の推敲は、第二章までと第三章以降とは大きな違いがあった。第一章と第二章は、第三章以降に比べて推敲箇所が多く、清書時およびその直後の推敲だけではなく、筆記具をかえて後日推敲した部分も少なくなかった。一方、第三章以降は、清書しながら同じ筆記具で行った推敲、あるいは清書の直後に同じ筆記具で行った推敲が確認できるのみで、清書後に改めて原稿を見直して推敲しているわけではないと見受けられる。あとで漢字を補うつもりで空欄にルビを振った箇所が、何箇所もそのままになっていたことから、原稿は十分に整備されていないといえる。宮川ひろは「春駒」を書きあげてからの出来事について、壺井栄に原稿を見てほしいという依頼の手紙を出したところ二〇日くらいしてから断りの返事が届き、そのあと原稿をそのままいまい込んでしまったと述べているが、返事が来るまでの約二〇日の間に第一章と第二章の推敲を熱心に行ったということなのではないか。そして、返信が届いてからは発表を諦め、推敲を継続しなかったということなのではないか。「春駒」現存稿の推敲の行われ方には、そのように想像したくなるような特徴が認められる。いずれにしても、宮川ひろにおける「春駒」発表の意思は途中で弱まった、と推敲状況から解釈して差し支えないだろう。

推敲できることの三つめは、「春駒」の現存稿は、他者への送稿を諦めた時点で宮川ひろにとって下書き稿的な位置づけになったのではないかということである。第四章最終ページに、直前の本文とは関係がないと思われる鉛筆での書き込みがあることから、それはうかがわれる。もはや他者にそのまみ見せるつもりで清書稿ではなくなっていたから、当該ページとは関係のない覚書きのような書き込みをしたのであろう。宮川ひろにとって「春駒」の原稿の意味付けは、時間とともに変化していったと考えられる。

(二) 原稿の保管状況等から考えられること

前述のとおり、二〇二二年二月に「春駒」の原稿の最終部分が発見されたが、原稿の前半と最終部分とが別々に保管されていたという事実からは、宮川ひろが「春駒」の原稿をいくつかの用途によって分けていた様子がうかがわれる。児童文学作家として活躍するようになってから、「春駒」の原稿は、ひろ自身にとって発表原稿とは別の複数の意味を持つものとなっていたのではないだろうか。児童文学作家宮川ひろにとって「春駒」とは何だったのか、原稿の保管状況等から考えられることを次に整理してみる。

まず、作品の前半、表紙から第五章の終わりの直前までであるが、これは映像作品『坪田譲治との出会いからはじまった宮川ひろの作家人生』（東京都豊島区、二〇二〇年）に収録されたインタビューの中で宮川ひろ自身によつて紹介され、撮影資料を返却する際に映像会社が梱包したままの形で保管されていた。宮川ひろにとっては、インタビューで語ったとおり、児童文学創作を志す前に書いた原稿、壺井栄の『二十四の瞳』に触発されて書いた習作という意味を持つもので、自分の作家人生を語る材料だったと思われる。ただし、ここで確認する必要があるのは、この映像作品では「春駒」の原稿綴の写真に「春駒のうた」自筆原稿」というキャプションが付され、さらにそれを紹介する宮川ひろのインタビュー画像に「春駒のうた」と創作の原点」という見出しがつけられているが、これは作家本人の認識だったのかどうかという点である。インタビューにおいて宮川ひろ自身は「春駒」の原稿綴を指して「春駒のうた」（偕成社、一九七一年）の先駆稿とも「創作の原点」とも明確には語っていない⁹⁾。映像作品がひろの没後に編集されたことを考えると、宮川ひろが「春駒」前半の原稿をどのような思いで保管していたのかということについては、映像作品の見出しやキャプションを鵜呑みにせずに見極める必要があるだろう。

宮川ひろは「春駒のうた」の宮川ひろさん（談）（日本児童文学者協会編『作家が語る わたしの児童文学15人』につけん教育出版社、二〇〇二年）で、児童文学創作を志す以前に壺井栄の『二十四の瞳』に触発されて書いたという「二百枚ほどの」原稿について語っている。ここでは「春駒」という題は

提示されていないが、前述の映像作品に収録されたインタビューと説明内容が同じであることから、「春駒」について語っていると判断してよいだろう。「春駒」およびそれを指すと推察される初期の創作物についての宮川ひろによる説明は、管見によるとこれらの他にはない。未発表作品「春駒」を取り上げて、それを『春駒のうた』の先駆作品であると述べたり、「創作の原点」と明言したりする宮川ひろの発言・記述は、どこにも見出すことができない。しかし、宮川ひろが『二十四の瞳』について語った文章¹⁾には、『二十四の瞳』を繰り返し読む中で『春駒のうた』を書きたい思いが、無意識なところで育っていたような気がしますとある。また、『春駒のうた』の成立について綴った文章²⁾には、次のように『二十四の瞳』との出会いが出発点だと記されている。

この作品を書きたい思いは、ずいぶんむかしから、無意識のところまで育っていたように思います。それは、『二十四の瞳』(壺井栄著 光文社)に出会ったことにありました。

未発表作品「春駒」と同様に『春駒のうた』についても、宮川ひろは『二十四の瞳』に触発されて創作への思いが育ったと繰り返し述べているが、このことから、宮川ひろの意識の中で「春駒」と『春駒のうた』は同じ思いを執筆動機とする作品であり、つながりをもつ作品であったと理解してよいのではないかと思われる。加えて、「春駒」という題名には触れられていないものの、『春駒のうた』(偕成社、一九七一年)の成立をめぐる、それが「四作め」であると語る次のような一節が『春駒のうた』の宮川ひろさん(談)³⁾(前掲)にあることにも注目したい。この一節は、宮川ひろの中に「春駒」を「春駒のうた」の先駆稿とする認識が確かにあったことを示しているのではないかと書くことに出会ったとき「春駒」(筆者注―この「春駒」は作品名ではなく、宮川ひろが少女時代に郷里で見た民俗芸能としての「春駒」を指している)を書きたいとそれだけを思いました。でも、どうしたら作品になるのかわからないままに、書いてはしまいこみ、書いてはあきらめて、本にしてみたらのは四作め。ずいぶんあとで、ようやく偕成社から本になりました。

このように確認してみると、「表紙」や「目次」とともに綴じたうえで身

近な場所に置いてあったとみられる「春駒」の前半部分は、宮川ひろにとって単に最初期の作品というだけではなく、「書きたいと願っていたのはこの一作だけ⁴⁾」と自ら語る『春駒のうた』の先駆稿という意味を持つものであったと捉えられる。そしてそれは、「書くことに出会ったとき」から「書きたい」と思っていたという民俗芸能春駒を描いた最初の作品とみられることから、宮川ひろ自身が「創作の原点」という特別な思いをもって保管していたと判断しても差し支えないだろう。

では、なぜ「春駒」の後半部分は綴じ紐から外され、前半から分離されていたのだろうか。続けて、二〇二二年二月に発見された「春駒」の第八章、第九章について、宮川ひろがそれをどのように意味づけていたのか、保管状況から探ってみる。

「春駒」の第八章、第九章は、『夜のかげぼうし』(講談社 1978年)、『東京へ帰る日まで』(同前 1985年)の先駆稿と思われるもの⁵⁾や「産休補助教員として担当したクラスの子どもたちのお別れの作文」⁶⁾「活字になっていく短編10ほどの原稿」などと一緒に、一九八五年の引越し時に箱に詰められたまま、取り出されることなく、手元とも身辺とも言えない「階段の下」で保管されていた(前掲、宮川健郎氏からの二〇二二年三月一日付Eメール参照)。前半部分とは別にされていたこと、他の児童文学作品の先駆稿や原稿、子どもの作文と同じ箱に入っていたこと、および箱には「赤いマジックインキでやや大きく、もうすすけた字で「1」 感恋」と書かれて(同前)いたこと等から考えると、この原稿は『春駒のうた』とは別の児童文学作品を執筆する際の「資料」として宮川ひろに意識されていたのではないかとと思われる。そして一九八五年以降、宮川ひろが二〇一八年の末に亡くなるまで、一度も箱は開かれなかったことから考えると、一九八五年の段階ですでに作品の「資料」としての役目は終わっていた可能性が高い。第八章が貞治の出征と戦死を描いたものであること、第九章が息子の戦死による心労を原因とする父の急死を描いていることから推察するならば、戦中を描き戦死の話題も取り上げている児童文学作品「夜のかげぼうし」(『びわの実学校』七十二号〜八〇号、一九七五年一月〜一九七七年三月)、『夜のかげぼうし』(講談社、一九七八年)等を執筆する際の参考資料として、『夜のかげぼうし』(講談社

1978年)、『東京へ帰る日まで』(同前 1985年)の先駆稿と思われるもの」と一緒にまとめて置いてあったのではないだろうか。仮にそうであるとするならば、自らの習作や記録を見返しながら次の作品を生み出そうとする創作姿勢をそこに見出すことができる。

さて、「春駒」現存稿の保管状況等から現時点で考えられることは以上であるが、未発見の第六章「将来の希望」と第七章「師範学校」にも言及しておきたい。前半や第八章、第九章と一緒に保管されていなかったという事実から、この二章は宮川ひろにとつて前半とも最終部分とも異なる意味を持つものだったと捉えることもできるのではないだろうか。第六章と第七章は、雪子が教員を志して師範学校に入学する話を描いたものであろうとタイトルから想像される。また、「梗概」に「雪子はその寮生活に耐えられなくて発病して家に帰る」とあることから、浮き沈みのある物語を記した部分であると推察される。さらに、宮川ひろ自身の人生体験の反映が色濃い部分ともいえる。そのような原稿を前半からも最終部分からも切り離して、宮川ひろはどのように扱い、意味づけていたのか。今後原稿が発見され、新たな情報が得られることが期待される。

(四) 作品の内容・表現等から気づくこと

「春駒」の作品内容や表現については、『春駒のうた』の成立過程における位置・意味や、宮川ひろの創作の原点としての意味付け、その後の児童文学創作との関係など、今後時間をかけて具体的に検討していく必要があると思われるが、ここでは今回の原稿の確認を通して気づいたことを三点、簡潔に記しておく。

一点めは、作品「春駒」における民俗芸能春駒の取り上げ方は、のちに宮川ひろが作品『春駒のうた』に関して述べた、「冬の季節をのりこえて、『春駒』の訪れを待つ作品を書きたいと思いました」(エッセイ『春駒のうた』によって)、『児童文芸』一九八六年一月)という思いと合致していることとである。「春駒」第一章には「長い冬にいたためつけられて来た村人の心に暖い春の訪れを知らせてくれる希望の歌声」とあり、春駒の歌声が厳しい冬の後の「希望」を示すものであることが明確に説明されている。そのうえで、

物語は母の病死、兄の戦死、父の急死という雪子にふりかかる人生の苦難を描き、春駒の太鼓の音の響く場面で閉じられる。「何処かで今も多勢の戦死者を出しているのかもしれない」戦中の厳しさの中においても、「春駒の歌声は平和の春を呼びながら近づいて来た」と語る結びの表現は、この物語が意識的に「冬の季節をのりこえて、『春駒』の訪れを待つ作品」として構想されていること、困難を乗り越えて希望を持つて生きようとする人の姿を描くものであることを示しているといえよう。作品「春駒」は、『春駒のうた』へとつながるテーマを、すでに明確に持っていた。

二点めは、作品「春駒」には三つの柱があるのではないかということである。第一の柱は、戦中における生活と思い、肉親を戦争で失う悲しみなど、地方に生きる人々の戦時の現実を描くことであり、厭戦の思いの表出である。第五章では、女学校の運動会の演目「ゆうぎ絵日傘」が時局にそぐわないと批判され、生徒たちは日傘なしでの演技を強いられるという、のちに戦争を語る児童書『つばき地ぞう』(国土社、一九八四年)で改めて作品化されるエピソードが描かれた。そして、前述のとおり、第八章には雪子の兄貞治の出征と戦死が描かれ、第九章には戦時下における老父の心労と急死が描かれた。「昭和四年四月」に始まり昭和十八年の春に終わる「春駒」の物語は、壺井栄の『二十四の瞳』と同様に、戦争を描くことを主要な柱とするものであったと捉えてよいのだろう。戦争の問題を描くというこの柱は、舞台設定を一九五〇年代とした『春駒のうた』にも引き継がれてゆく。

第二の柱は、理想の教育を描くことである。第一章で「おつかない先生のいる学校へ行くのなんかいやだ」と泣いた雪子は、第二章で新任の「木村先生」を慕って学齢前から学校に通うようになる。木村先生は「これまでは教科書以外の本などは読んだことのなかった」子どもたちに「小学館の学習雑誌をとってくれたし校庭の葉桜の蔭で話してくれた美しい童話は子供のもつ夢の世界を広く豊にしてくれた」。また、「学芸会」や「誕生会」を企画・開催してくれた。このように「春駒」は、新任ながら分教場の教育の改善・充実に熱心に取り組む教員「木村先生」を登場させて、大正自由教育を思わせるような理想の教育を描き出しているが、このこともまた『二十四の瞳』との共通点であろう。しかし「春駒」において理想の教育は、それを提示して

終わるものではなく、「木村先生」に憧れて雪子が教員となるという物語展開を導くものとしても機能している。さらにそれは、雪子と「木村先生」との絆としても機能している。第二の柱は、理想の教育を描くこととするよりも、理想の先生への憧れを描くこととするほうが妥当なのかもしれない。理想の先生への憧れを軸に物語が展開するのは、『二十四の瞳』とは異なる「春駒」の特徴である。「春駒のうた」にも、理想的な教師像は描かれても、その教師への憧れは描かれなかった。

第三の柱は、昭和初期の地方の小さな寒村、具体的にいうと宮川ひろ自身の故郷でもある上越国境の山村を描くということである。「春駒」は山村の風景描写から始まり、折に触れて山村の自然の美しさや地域の特徴、そこで生きる人々の暮らしが描かれていく。そうした中で興味深いのは、生活環境の厳しい山村の負の側面、貧しさの中で現状の改善もできず視野も心も狭くなりがちな村の人々の様子や心情などが要素所で強調されている点である。「他人の不幸は『隣の貧乏鶴の味』として喜び隣人だったから力を合はせて打開の道を樹てることもなされない」（第一章）、「生れて来たことを祝福されるでもなく、一年一年成長してゆく我が子の姿を喜ぶだけの心のゆとりもなく少しでも仕事の役に立つ日が早く来る様にという事だけを考えて育てられ誕生日も知らずに大きくなった子供達」（第三章）「峠を越した隣の村の医者者を頼む時は病み疲れた人の臨終の時ときまっていた」（第五章）など、身も心も豊かさからは切り離れた村人の姿が物語展開とのかかわりの中で説明されている。寒村に生きる人々の閉鎖性や家庭の事情に翻弄される子どもの哀れさなどは『二十四の瞳』にも描かれているが、村全体の負の側面の説明は「春駒」の方が際立っている。ここにも「春駒」の特徴があるといえるだろう。

なお、宮川ひろは、児童文学作家としての出発以後も故郷の山村を繰り返し描いているが、その描き方は「春駒」と同じではない。『春駒のうた』も含めて、のちの児童文学作品では負の側面の強調はあらかた消え、エッセイなどでは環境の厳しい小さな村ゆえの生活の知恵や魅力が語られるようになる。山の村の描き方の変化は、種々の意味で宮川ひろにおける児童文学作家としての意識の確立と対応しているようにも見受けられるが、それについて

は別稿を期したい。

最後に三点めとして、「春駒」の表現の面に少々触れておくことにする。表現に関する分析を今回は行ったわけではないが、「春駒」の原稿を概観して表現の特徴として気づくのは、のちの児童文学作品と比べて一文が長く、「山の秋は錦を競って名工の秘術によつて染め上げた様な裾模様を水鏡に写して」（第二章）など古めかしい表現も使われているということである。児童文学の文体とは異なることは明らかであろう。また、民俗芸能春駒を描いた部分を未発表作品「春駒」と児童書『春駒のうた』とで比べてみると、表現の仕方の違いに気づく。「春駒」では、前述したとおり春駒の歌声は冬の厳しい山村で生きる人々にとって「希望の歌声」であるといった説明を語り手が行っているが、『春駒のうた』にはそれはない。しかし、『春駒のうた』は、春駒の歌と踊りの描写やそれを迎える人々の行動の描写が作品「春駒」よりも具体的に詳しく、視覚的イメージを形成しやすだけでなく、説明がなくともその訪れを喜び歓迎する村人の気持ち伝わるようになっていく。「春駒」から『春駒のうた』への展開は、宮川ひろの表現技術の進化を確認する材料となるとともに、児童文学の文体について考える材料も提供しているのではない。使用されている品詞の比率などを比べてみると、さらに見えてくることもあるかもしれない。

*

以上、「春駒」の原稿の確認を通して見えてきたことを簡潔に整理し、「春駒」の現存稿は宮川ひろの児童文学の成立と展開を考えるための材料として意義を持つと認識するに至ったが、今回は原稿の背景の調査も作品の内容と表現についての検討・考察も十分に行ったわけではない。今後の課題が残っていることをここに明記しておく。のみならず、「春駒」とその関連作品をめぐっては、気になることも残っている。『春駒のうた』について宮川ひろは、「書いてはしまいこみ、書いてはあきらめて、本にしまつたのは四作め¹⁵⁾」と語っているが、仮に一作目が「春駒」であるとするならば、二作め、三作めは何なのか。『春駒のうた』の成立までにはどのような流れがあり、そこから何を見出すことができるのか。そして、児童文学作家宮川ひろにとって「四作め」以降はあつたのかどうか。疑問は多く、課題は尽きない。

そもそも『春駒のうた』が宮川ひろの代表作であること、宮川ひろ自身も「書きたいと願っていたのはこの一作だけでした」⁽¹⁶⁾とさえ記していることを考えると、「春駒」と『春駒のうた』をめぐる探究は宮川ひろの児童文学の特徴と意味の探究でもあり、それは現代児童文学の中における宮川ひろの位置づけを考えることにもつながるものといえるだろう。そこまでたどり着いたときに、「春駒」現存稿の意義はより明瞭なものとなるのではないか。その到達点を意識して、「春駒」現存稿の紹介をひとまず締めくくることにする。

注

- (1) 二〇二一年九月二五日に、宮川ひろの長男で著作権管理者である宮川健郎氏から、所在不明の「春駒」の原稿が発見できる可能性は低いとうかがった。
- (2) 「児童文学作品を発表し始めた頃、母は万年筆で原稿を書いていましたが、『四年三組のはた』(一九七五年 偕成社)から鉛筆になりました。」と宮川健郎氏は語っている(中地文・大木葉子「宮川ひろの児童文学と教育」宮川健郎氏に聞く)、『宮城教育大学紀要』第五五巻、二〇二一年一月。
- (3) 二〇二三年一〇月九日付の中地文宛(〇〇大木葉子)Eメールに、宮川健郎氏は「二つを出してきて、くらべ」たところ「原稿用紙も筆記具も同じだと思われる」と記している。
- (4) 映像作品『坪田譲治との出会いから始まった宮川ひろの作家人生』(東京都豊島区、二〇二〇年)に収録されたインタビューの中で説明している。
- (5) 宮川健郎編「宮川ひろ年譜」(未発表、一九八九年二月二八日付)の「一九五〇〔昭和二五〕年 二七歳」の項に「二月九日、宮川健三郎と結婚。三十一日、退職。東京都北区西ヶ原三二六〇に住む」とあり、「一九五九〔昭和三四〕年 三六歳」の項に「五月、板橋区赤塚の借家に入る」とあることによる。年譜作成の経緯については、中地文・大木葉子「宮川ひろの児童文学と教育」宮川健郎氏に聞く(『宮城教育大学紀要』第五五巻、二〇二一年一月)の中で宮川健郎氏が説明している。
- (6) 映像作品『坪田譲治との出会いから始まった宮川ひろの作家人生』(東京都豊島区、二〇二〇年)に葉書の画像が提示され、キャプションに「宮川ひろ宛て壺井栄葉書(一九五四年八月九日消印)」と記されている。
- (7) 注(4)に同じ。
- (8) 中地文・大木葉子「宮川ひろの未発表作品「春駒」について——解題と本文紹介(一)——」(『宮城教育大学紀要』第五六巻、二〇二二年一月)の注(3)参照。
- (9) 映像作品『坪田譲治との出会いから始まった宮川ひろの作家人生』(東京都

豊島区、二〇二〇年)のインタビューで、インタビューをとめた野上暁は未発表作品「春駒」を「春駒のうた」と呼び、それを宮川ひろは訂正も否定もせずに話を進めているが、宮川ひろ自身が「春駒」と『春駒のうた』を重ねたり、その関係に言及したりする発言はみられない。

- (10) 宮川ひろは二〇一八年二月に亡くなっているが、映像作品『坪田譲治との出会いから始まった宮川ひろの作家人生』(東京都豊島区)は、二〇二〇年に完成している。

- (11) 宮川ひろ「二十四の瞳」(『子どもの本棚』一九七八年二月)

- (12) 宮川ひろ「春駒のうた」によせて(『児童文芸』一九八六年二月)

- (13) 注(12)に同じ。

- (14) 注(5)に示した宮川健郎編「宮川ひろ年譜」(未発表、一九八九年二月二八日付)の「一九三七〔昭和一二〕年 一四歳」の項に「四月、前橋の群馬県立女子師範学校第一部入学(全寮制)。／六月、発熱。以後、入退寮をくりかえす。」とあり、一九三八〔昭和二三〕年 一五歳」の項に「二月、休学」、一九三九〔昭和一四〕年 一六歳」の項に「二月、群馬県立女子師範学校退学」とある。

「春駒」の物語では、雪子は第九章で師範学校を卒業するので、宮川ひろの人生とそっくり重ねられているわけではないが、「梗概」の「雪子はその寮生活に耐えられなくて発病して家に帰る」という記述は、宮川ひろ自身の人生体験を反映したものとみられる。

- (15) 「春駒のうた」の宮川ひろさん(談)(日本児童文学者協会編『作家が語るわたしの児童文学15人』につけん教育出版社、二〇〇二年)

- (16) 注(12)に同じ。

【謝辞】宮川ひろの未発表作品「春駒」の現存稿の調査・紹介についてご許可くださり、現存稿および関連資料の確認に際して格別のご配慮を賜りました宮川健郎氏とご家族のご厚意に、心より感謝し御礼申し上げます。

(令和六年一月二十九日受理)

“HARUKOMA” :The Unpublished Work by MIYAKAWA Hiro(3)

NAKACHI Aya and OKI Yoko

Abstract:

MIYAKAWA Hiro, a contemporary Japanese children's literature writer, said before the publication of her masterpiece *Harukoma no Uta*, she had repeatedly written on the same subject. This time, I had the opportunity to check the manuscript of “Harukoma”, an unpublished work that is believed to be the first work leading to *Harukoma no Uta*. This manuscript is in the custody of Mr. MIYAKAWA Takeo, son of MIYAKAWA Hiro. In this paper, following on from the previous articles, we have transcribed the text of this work, from Chapters 8 to 9, and organized the information obtained through research for this manuscript.

Key Words : MIYAKAWA Hiro, Children's Literature, “Harukoma” , *Harukoma no Uta*

